

オランダ商館型日本観と鎖国

はじめに

江戸時代にヨーロッパで伝達されていた日本に関する情報の性質は、同じ「日本」を扱っても、様々であった。例えば、「日本史」を日本におけるキリスト教布教史として認識していたカトリックの著者と、それに対抗してケンペルのように日本の宗教や古代史について詳細に記述するプロテスタントの著者との間ではその観点がかなり違っており、それによりその日本観も大きく異なっているという事は明らかである。では、一六四〇年代から幕末までの長い期間に日本情報を独占していた出島のオランダ商館から生まれた「日本誌」はヨーロッパで日本をどのようにイメージづけていたか、そしてヨーロッパにおける日本理解にどのように貢

フレデリック・クレインス

献したか。これらの質問に答えるために、本稿では、ヨーロッパにおける日本観の形成に特に重要な役割を果たした、カロン、モントーヌス、ケンペル、ツェンベリー、シーボルトの五人の著作に注目し、その日本観の変遷をたどっていく。この五人の内、モントーヌスは唯一実際に来日した経験がないが、モントーヌスはオランダ商館長日誌の一次史料を忠実に利用すると共に、彼の「日本誌」はその後のヨーロッパにおける日本関係記述の重要な典拠となったので、本稿には欠かせない資料である。

これら五人の著作における日本観の変遷をたどることは、単に日本に関する情報の変遷をたどるということではない。むしろ、ヨーロッパにおける日本関係図書は、日本の現実を示すという以上にヨーロッパの関心を反映しており、その時々々の関心に応じた日本叙述の変化がみられる。以下、こうした視点から上記の著作

を、初期、中期、後期の三期に区分して、その特徴を分析していく。

一、初期のオランダ商館型日本観―現実主義―

一七世紀にオランダ商館からヨーロッパに伝達された情報は、日本の諸事情を異質なものとしては扱っておらず、ヨーロッパの思想的枠組の中で捉えられている性質をもっている。この初期の代表的な著者はカロン (François Caron, 1600-1673) である。カロンの著した『日本大王国志』(一六四五年)は、一六三六年に著者が東インド会社バタヴィア在住のルカース総督 (Philip Lucasz) に提出した日本事情に関する報告書が基になっている。この報告書はオランダに渡り、そこで一六四五年に出版された。一六五〇年代に版を重ね、英語、ドイツ語、フランス語、ラテン語、スウェーデン語にも翻訳されていることからみると、当時のヨーロッパにおける日本への関心の高さが窺える。

本書は、東インド会社総督に提出された報告書の性格通り、経済的視野の上に立って一七世紀の日本を的確にまとめたものである。しかし、この経済的視野の上に立った書き方は、日本の事情をヨーロッパ社会の延長線上に捉えて記述するという結果を同時にもたらし、当時のヨーロッパ人にとっても違和感を感じさせな

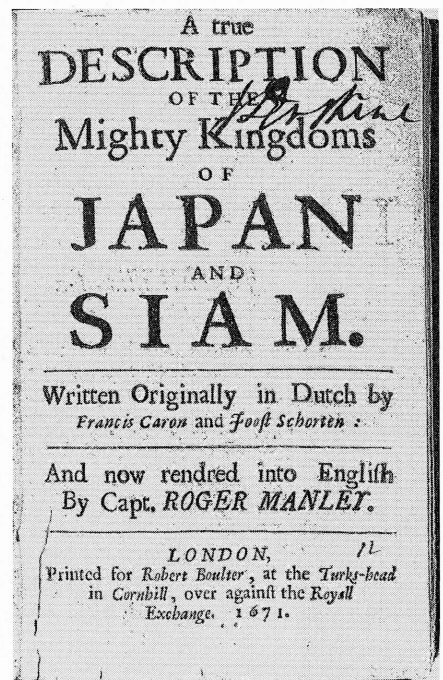


図1 カロン『日本大王国志』英語版の標題紙 (国際日本文化研究センター蔵、以下同)

いような内容になっている。それがよく表れているのは用語である。カロンは、日本独特の位である「将軍」に Keyser (皇帝)、侍に soldaten (兵士)、大名に koning (王) というヨーロッパで連想されやすい用語をそれぞれ当てている。唯一、「天皇」には Dayro (内裏) という日本語の用語をそのまま使用しているが、この用語がローマ教皇と同じような意味をもつという説明を付け加えている。このような記述の仕方や用語の使用によって、カロンの本は、それが日本についての本であることを知らなければ、ヨーロッパのある地域を描写していると思われる印象すら与えている。

このようなヨーロッパ人にとって親しみやすい記述の中で、ヨーロッパ人にとって異質な事象として取り上げられている項目をあえて捜すと、二つしかみあたらない。その一つは切腹 buyok snijden

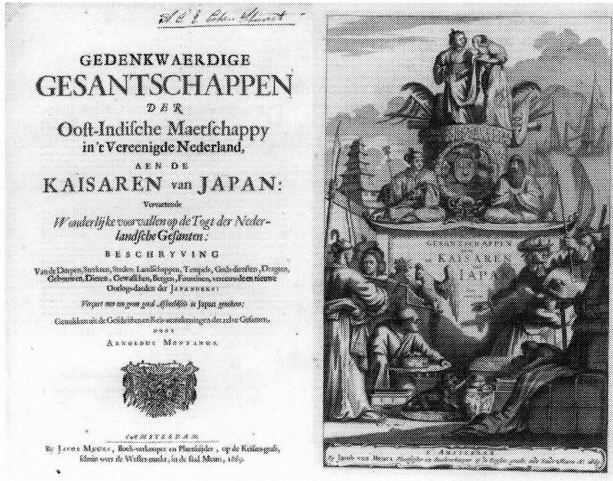


図2 モンターヌス『東インド会社遣日使節紀行』標題紙および口絵

である。切腹についてカロンは数箇所ですべて詳細に記述しており、後の著者はそれを野蛮な行為として評価していくことになる。

二つ目に異質なこととして取り上げられているのは売春、特にお寺で行われていた売春行為やオランダ商館員が利用していた売春制度の存在である。『日本大王国志』初版にはオランダ商館員が利用した売春制度について次の通りに記述されている。

極悪な慣習に従って、オランダ船の上級船員が到着するとす

ぐに居酒屋や宿屋の主人に話しかけられ、滞在中に売春婦あるいは内縁の妻が欲しいかどうかと尋ねられ、そして女の人

が連れて来られて、結婚契約を結ぶ。

この売春に関する記述は、カロンが書いたものではなく、本書の編集にあたったハーヘナール (Hendrick Hagenae) が独自に追加した記述である。ハーヘナールは平戸に滞在した商人であり、カロンよりも前にオランダに戻っていた人物である。ハーヘナールの付け加えた売春の記述は、後の版でカロンによって削除されている。

カロン『日本大王国志』出版より二〇年後に、モンターヌス (Arnoldus Montanus, 1625?-1683) という著者が『東インド会社遣日使節紀行』(一六六九年)⁴を著している。本書は、東インド会社の文化的活動を対外的に紹介するために、同社取締役の一人であったウィッツェン (Cornelis Witsen) が、オラニエ公ナッサウ伝やオランダ人英雄伝などで知られた流行作家モンターヌスに執筆を依頼したものであると思われる。モンターヌスは、上述のように来日した経験はないが、ウィッツェンの仲介により、一六四九年から一六六三年にかけてのオランダ商館長日誌、とりわけ、フリーシウス (Andreas Frisius)、ワーヘナール (Zacharias Waegenae)、インダイク (Hendrik Indijk)、ゼルデレン (Johannes van Zelderem)

商館長の日誌という貴重な一次史料を活用することができ、それらの日誌を忠実に編集することによつて、信頼のおける「日本誌」を完成させた。

モンターヌスの著述における姿勢は、日本人と西洋人を基本的に同質に扱おうとするものである。そのため、モンターヌスは日本の事情を絶えず他の国の事情と比較しながら説明しようとしている。特に比較対象として取り上げられているのが、ケルト人やガリア人であり、それは日本の宗教に関する記述や、カロンのところで取り上げた切腹や売春に関する記述にもよく表れている。例えば、モンターヌスは殉死について次のように記述している。

一般に君主が死去すると、十、二十、三十人あるいはそれ以上の者が君主と共に死ぬために切腹する。(中略)多くの者は、君主の人生と自己とを結びつけている。(中略)こうした君主と共に死ぬという習慣はとても古いものである。というのは、ヘイランドが生まれる以前、そういう慣習がガリアで行われていたからである。ガリアでは兵士たちは日本と同じように自分がある君主と結びつけている、とカイザルは証言している。

この記述の中でモンターヌスは殉死を異質なものとして取り上げ

ておらず、ヨーロッパ人にとって身近な存在であるガリア人の慣習との接点を提示している。また、日本の宗教についても、モンターヌスはカトリック教会との類似性を説いている。

このようにモンターヌスはカロンに続いて、日本社会をヨーロッパとそれほど違いがない、同質の社会として記述していることが分かる。

モンターヌスの記述は、当時の旅行記の様式を踏襲しており、後のケンペルのような様式、すなわち、

- 一、地理
- 二、歴史
- 三、宗教
- 四、経済
- 五、江戸日記

という、概念的に整理された様式にはなっていない。モンターヌスは、地理的な記述を行った後、日本における移動の経路、いわば「道」に沿った叙述を行い、西海道から東海道へと移動しながら、その土地ごとの注目すべき事象や出来事などを取り上げている。京 (Miacoo) の場合、本能寺の変や五条大橋が取り上げられる。ここでもモンターヌスは、日本だけの記述にとどまらず、他

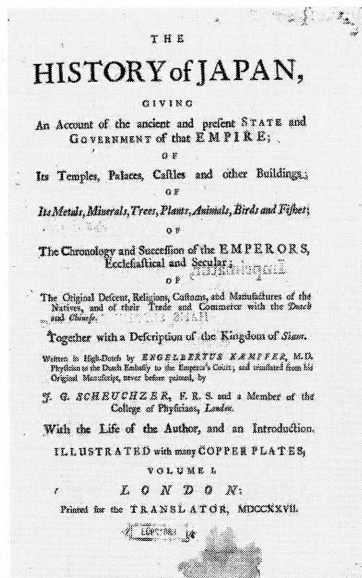


図3 ケンペル『日本誌』標題紙

の国との比較を必ず付け加えている。例えば五条大橋の説明のところで、ヨーロッパ、インカ、中国の有名な橋との比較が数頁にわたって叙述されている。その中で五条大橋自体について書かれている部分は全体の五分の一ほどしかない。それほどモンターヌは日本を世界の中の一部分として位置づけて記述している。また、橋の描写に際しては、通行人や周囲の店の様子も描かれ、臨場感を醸し出している。こうした具体的・空間的な叙述法という点でも、モンターヌスの叙述は、後のケンペルのような知識人特有の抽象的な叙述法とは対照的である。

二、中期のオランダ商館型日本観—啓蒙主義—

カロンおよびモンターヌスの「日本誌」出版以後、一八世紀に

入るまで、実際の日本滞在あるいは一次史料に基づいた日本に関する記述が途絶え、ヨーロッパの知識人は首を長くして、日本の新しい情報を待ち望んでいたはずである。この期待に応えたのはケンペル (Engelbert Kaempfer, 1651-1716) の『廻国奇観』(一七二二年) および『日本誌』(一七二七年) である。ケンペルは東インド会社のカンプハイネ総督 (Johannes Campluis) の計らいによって、一六九〇年に日本に渡航した。カンプハイネは日本趣味に興じ、ケンペルに商館長日誌など多くの史料を渡し、日本研究を薦めた。『廻国奇観』は日本を含むペルシアなどケンペルが旅した各地についてのノートをまとめたものである。一方、『日本誌』はケンペルの生前には出版されず、スローン卿 (Sir Hans Sloane) が原稿を入手し、シヨイヒツアー (Johann Scheuchzer) に編集を依頼して、出版に至った。そのため、『日本誌』における記述はケンペルのものであるのか、あるいはシヨイヒツアーが元の原稿から離れて、自分なりに解釈したのが一つの研究課題であるが、ここでは、この課題に触れず、純粹に当時のヨーロッパに影響を与えた史料として扱う¹⁰⁾。

ケンペルの『日本誌』における記述を分析すると、その記述様式から、カロンやモンターヌスのような親近感を感じさせる叙述の様式とは異なり、「科学性」を意識し、日本に対して距離を置いた姿勢が窺える。ケンペル『日本誌』には、モンターヌスのよう

な比較文化的な記述もほとんどみられない。記述がより科学的になり、事物に即した淡々とした叙述が多い。その「科学性」はまず用語の使用に表れている。カロンやモンターヌスは日本語の独自の用語をヨーロッパの概念に「翻訳」しているのに対して、ケンペルは *dainyo* (大名)、*shonyo* (小名) のように日本語の用語をそのまま用いている。日本に來たことがないヨーロッパの読者はこれらの用語をどのように理解したのであろうか。少なくとも、これらの用語が表す位や物を自分たちの社会には存在しない異質なものとして認識したに違いない。このように「科学性」を追求して日本の概念をそのまま伝える情報は、ヨーロッパの読者にとって日本との距離を感じさせるものであり、日本の事情に対する違和感も生まれる。この違和感に当時の啓蒙主義の思想的枠組が加わり、日本に対する批判も表れてきた。例えば、天皇の神格化や日本人の起源について、ケンペルは次のように批判している¹¹⁾。

国の起源に関する日本人の言い伝えは、それを否定する必要もない。なぜなら、内容があまりに説得力に欠け、常識的判断に基づく疑問にさえ、とても堪えられるものではないからである。

ケンペルのこの批判は、モンターヌスが同じ天皇の神格化をギリ

シア人やローマ人、中国人も行っていることとして相対化し、ヨーロッパとの異質感を緩和しようとする記述をしているのとは対照的である。また、モンターヌスが古代ヨーロッパの習俗に接点を求めていた「切腹」については、ケンペルは初めて以下のように *self-murder* (自殺) と表記している¹²⁾。

これらの儒者たちは、自殺を容認するだけでなく、英雄的で推奨すべき行為とみなし、また、恥ずべき死を避けるための名誉ある手段、あるいは勝利した敵の手に落ちることを防ぐための行為とみなしている。

また、ケンペルは「切腹」と同様に、遊女に対しても批判的である¹³⁾。

ここで、カロンの小さな誤りを指摘しておかなければならない。カロンの『日本大王国志』では、日本の女性の名誉に配慮し(おそらく、彼の日本人の妻に対する尊敬の念からであろう)、公的に特権を与えられている遊廓以外には、この商売は日本全国の他の都市や村に全く存在しないとされている。しかし、日本という大きい島に、女郎屋とはいえない宿屋がほとんど存在しないことは、疑いようのない真実である。

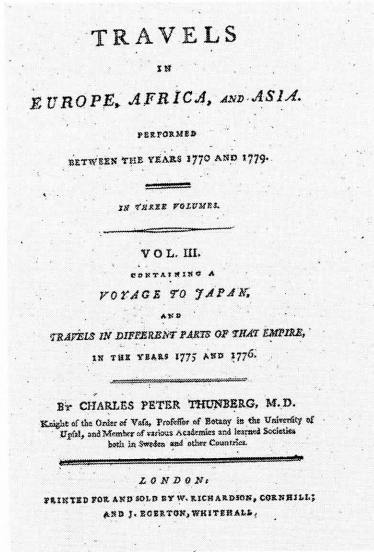


図4 ツェンベリ『ヨーロッパ・アフリカ・アジア旅行記』英語版の題紙

日本の固有名詞については原音表記で記し、違和感を感じさせる事象については対応するヨーロッパの概念で説明を加えるという手法は、日本と距離をとり、それを批判的・否定的に捉えていく姿勢を示すものであり、それはまた、ヨーロッパの優越感を感じさせる。ケンペル『日本誌』は、モンターヌに代わる一八世紀ヨーロッパの日本に関する主要な典拠となり、その否定的な日本観は、モンテスキューやデイドローにも受け継がれていくことになる。

ケンペル『日本誌』出版より七〇年を経て、ツェンベリ（*Carl Peter Thunberg, 1743-1828*）の『ヨーロッパ・アフリカ・アジア旅行記』（全四巻、一七九六年、初版はスウェーデン語、一七八八・一七九三）¹⁴が出る。ツェンベリはリンネの下で植物学を学んだ

後、アムステルダムに渡り、そこでブルマン（*Jean Burmann*）の後見の下で東インド会社に就職し、来日した。ツェンベリはヨーロッパに戻った直後に、英国王立学士院（*Royal Society of London*）の紀要（*Philosophical Transactions*）の第七〇号（一七八〇年）に「日本国論」という論文を投稿している¹⁵。この論文はすぐにスウェーデン語、オランダ語、ドイツ語、ロシア語でも出版される。その数年後にツェンベリの前述の旅行記がまずスウェーデン語で出て、その後、英語やフランス語にも訳される。この旅行記の半分近くは日本での滞在を題材にしている。

本書の記述はケンペルと同じく「科学的」であり、日本と距離を置いた姿勢を読み取ることができる。ツェンベリはいくつかの項目を立てて記述しているが、ケンペルと比べて新しい情報はあまりみられない。それどころかケンペルの記述をそのまま転載している箇所もある。例えば「切腹」に関しては、ケンペルと同様、儒教を扱った章の中で、ケンペルの記述を以下の通りに転載している¹⁶。

自殺は合法的とされているだけでなく、評価され、英雄的な行為と考えられている。

しかし、ツェンベリの記述には、同じ啓蒙主義思想に基づき

ながら、ケンペルと違って、日本をより肯定的に評価しようとする姿勢がみられる。この評価は、日本人が清潔を好み、生活水準も高く、豊かである一方で、質素、儉約に努め、誠実でもあるといった日本人の性格付けによく表れている。これはツェンベリーの来日した時期が、ケンペルの時代とは異なり、日本における蘭学の勃興期にあたっており、ツェンベリー自身、日本の知識人との交流をもつことができ、多くの好印象を受けたことによるかもしれない。このような背景からツェンベリーは、ケンペルと同じ科学的距離を置きながらも、日本を理想化し、一つのモデル国として捉えている。

三、後期のオランダ商館型日本観—産業革命期—

ケンペルやツェンベリーより一段と日本の事情や諸物を「科学的」「網羅的」に記述したのはシーボルト (Philipp Franz von Siebold [1796-1866]) である。シーボルトの来日のきっかけは、ナポレオン戦争後、ファン・デル・カペッレン (Van der Capellen) 総督が産業革命の思想的枠組の中で、極東貿易の活性化の一環として、日本に対する博物学的調査を進めようとしたことである。シーボルトは実際に、ファン・デル・カペッレン総督に対する書簡の中で、「日本における博物学的調査の使命を帯びた外科少佐」(de

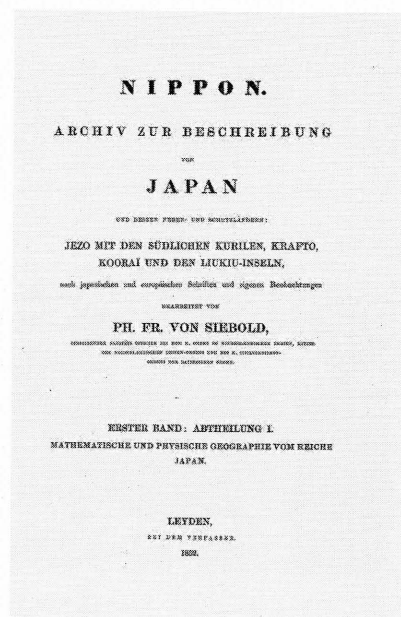


図5 シーボルト『日本』1825年版の標題紙

chirurgyn-majoor, belast met het natuurkundige onderzoek in Japan) と署名している。

シーボルトが著した大著『日本』(一八三二年版)は、ドイツ語標題 Nippon: Archiv zur Beschreibung von Japan に掲げられた Archiv (史料集) の名の通り、「物」を網羅的に叙述している。例えば、「武器」の項目においては、弓、矢、鏝、かぶと、刀、鉄砲、弾、鏢、楯、幡から古代の武器に至るまで、数十頁にわたって詳細な記述がなされている。このように「物」に注目することにより、日本について嘗てない詳細な情報がヨーロッパに流れることとなるが、その徹底した客観性のために、結果的にケンペル以上に日本に対して距離を置いた記述となっている。

同書の構成は、地理、民族・歴史、(学芸)、宗教、商業、隣国

から成り、民族と歴史の項目の間に江戸参府紀行が挿入されている。これは明らかにケンペルの様式を踏襲したものである。とはいえ、ケンペルのような日本に対する評価や判断はみられない。

例えば *Pantheon von Nippon*（日本の神々）の項は、日本の全ての神を収めた目録となっており、その記述の中にはシーボルトの個人的な意見が加えられておらず、日本の神の言い伝えがそのまま掲載されている。また「江戸参府紀行」をみると、情報量は膨大であるが、記述は平板で、日本がどのような国で、どのような民族であるのかはあまりみえてこない。シーボルトの『日本』はヨーロッパの知識人に多くの専門的情報を与えた革新的な本でありながらも、そこにはモンターヌスのように日本に親しみをもてるような、読者の興味を引く記述が欠けている。

結 論

以上のように、一七世紀から一九世紀にかけてのヨーロッパにおける日本に関する記述には、次第に親近感に基づくものから科学的に観察するものへと変わっていく傾向がみられる。それは、ヨーロッパにおける科学的な思考や対外的な関心の変化を反映したものである。本稿で取り上げた五人の著者のそれぞれの日本観を、視点を逆転させてヨーロッパの都市を日本に紹介すること

に例えてみると、次のように言えるかもしれない。まずモンターヌスであれば、アントワープは大阪に似た都市、ブリュッセルは東京に似た都市という形で紹介するであろう。対してケンペルであれば、アントワープは商業の都市、ブリュッセルは官庁の都市という形で、そしてシーボルトであれば、アントワープは人口四万人、ブリュッセルは人口一〇〇万人の都市という形で紹介するであろう。つまり、モンターヌスが読者の実感に訴えるような記述をするのに対し、ケンペルやさらにシーボルトは、科学的ではあるがそれだけ情感を排した、抽象的記述が多いのである。

以上のような傾向は、鎖国が長期間に及んだことで、ヨーロッパにおける日本の情報が不足し、日本があまり知られなくなったことにもよるであろう。レース (Rich. P. A. van Rees) という著者が『五十年前の日本とオランダ』（一九一四年）¹⁸の中で、一八六二年六月の幕府の遣欧使節団のハーグ訪問について以下のように回想しているが、これは当時のオランダにとっても、いかに日本が珍しくて、興味の対象であったかをよく示している。

日本の紳士たちが町に入った時の歓迎を、昔のハーグの人はまだ覚えていたであろう。道は旗で飾られ、赤い胸当ての制服を着た竜騎兵・擲弾兵・ライフル鉄兵・音楽隊が行列に随行し、行列は駅からホテル・ベルヴェュへ一歩一歩と進んで行つ

た。刀の柄（が見えていた）にもかかわらず、我々若者は彼らが女性であると思ひ込んでいた。しかし、彼らの黄色い帽子、顎紐、髭が無いこと、櫛で梳き上げられた丁髷、扇子は、この子供じみた考えの弁解になる。少しでも暇があれば我々若者はホテル・ベルヴェー向かい、そこで「ガリバルディ万歳」のメロディで「日本人万歳」と声を限りに歌った。彼らの多くはオランダ語ができ、この歓迎を感謝し、笑いながら窓の前に姿を現し、群衆に様々な小さな日本のお土産を投げた。これらのお土産は熱心に掴み取られ、意気揚々と学校や家に持ち帰られた。当時、「日本人」という言葉は皆の口先にあつていた。

附記 本稿の成るに当たって、国際日本文化研究センター図書館および武田科学振興財団杏雨書屋にお世話になりました。厚くお礼を申し上げます。宮田昌明氏からは、下書きの文章化、原稿の校閲など、本稿の成立に全面的に協力を得ました。あらためて厚く感謝申し上げます。また、原稿を校閲した妻桂子にも感謝したい。

注

1 初版 Beschrijvinghe van het machtigh Coninckrijk Japan, Gestelt door Francoys Caron, Directeur des Compagnies negocie aldaer, ende met eenige

anteekeningen vermeerderd door Hendrick Hagenaer. *Begin ende*

Voortgang van de Vereenigde Nederlandsche Geochroyeerde Oost-Indische

Compagnie. Amsterdam, 1645 の第四冊に所収なれている。Amsterdam :

Theatrum Orbis Terrarum, 1969 の影印版を利用した。カロンによる校正版

は一六六一年に出版される。本研究では、この校正版の英語訳 *A true*

description of the mighty kingdoms of Japan and Siam. London : Printed for

Robert Boulter, 1671 (国際日本文化研究センター所蔵) を利用した。

2 *Begin ende Voortgang*, vol. 4, p. 162 にハーネルのノートとして付け

加えられている。カロンはこの用語を元々 *Erf-heer* (世襲君主) と定義

している。

3 *Ibid.*, p. 159.

4 Arnoldus Montanus, *Gedenkwaerdige gesantschappen der Oost-Indische*

maetschappij in 't Vereenigde Nederland, aan de kaisaren van Japan. ¹

Amsterdam, By Jacob Meurs, 1669. 国際日本文化研究センター所蔵本を利用した。

5

6 Peter Rietbergen, *Japan verwoord*. Hotei Publishing, 2003, p. 203. Reinier H.

Hesselsink ⁴ *Memorable Embassies: the secret history of Arnoldus Montanus'*

Gedenkwaerdige Gesantschappen (Quaerendo vol. 32, pp.99-123) ⁵ キン

ターヌスあるいは出版社のメウルスが日誌を購入したと論じている。

9 Montanus, *op. cit.*, p. 289.

7 Engelbert Kaempfer, *Amoenitatum exoticarum*. Lingoviae, Henrici Wilhelmi

- Meyer, 1712. 国際日本文化研究センター所蔵本を利用した。
- 8 Engelbert Kaempfer, *The history of Japan*. London : Printed for the translator, 1727. 国際日本文化研究センター所蔵本を利用した。
- 9 Riebergen, *op. cit.*, pp. 192-193.
- 10 ショイツァー版およびドームによって刊行されたケンペルの原稿
(Christian Wilhelm Dohm, *Engelbert Kämpfers Geschichte und Beschreibung von Japan : aus den Originalhandschriften des Verfassers*. Lemgo, Meyerschen Buchhandlung, 1777-1779.) を実際に比較すると、ケンペルのノートはシ
ョイツァーの版ほど批判的ではな。
- 11 Kaempfer, *The history of Japan*, p. 100.
- 12 *Ibid.*, p. 250.
- 13 *Ibid.*, p. 438.
- 14 英語版 Carl Peter Thunberg, *Travels in Europe, Africa, and Asia, made between the years 1770-1779 in three volumes*. London : W. Richardson, n.d.
国際日本文化研究センター所蔵本を利用した。
- 15 国際日本文化研究センター所蔵野間文庫本を利用した。
- 16 Thunberg, *op. cit.*, vol. 3, p. 35.
- 17 Philip Franz von Siebold, *Nippon : Archiv zur Beschreibung von Japan*.
Amsterdam und Leyden : J. J. Müller und C. C. Van Der Hoek, 1832. 武田
科学振興財団杏雨書屋所蔵本を利用した。
- 18 Rich. P. A. van Rees, *Japan-Holland vóór vijftig jaar*. Amsterdam, 1914,

p.54. 国際日本文化研究センター所蔵本を利用した。